



2008.6.1-6.8

山口県文書館

Yamaguchi Prefectural Archives

〒753-0083 山口市後河原150-1 083-924-2116

<http://ymonjo.ysn21.jp/>

開催にあたって

中国四国地区アーカイブズウィークは、昭和63年（1988）6月1日、我が国で初めて、アーカイブズ（記録資料）の保存利用に関する法律「公文書館法」が施行されたことを記念して、アーカイブズの重要性と保存利用についてPRするものです。6月1日からの一週間、中国四国地区の文書館施設が共同して、様々な行事を展開します。

昨年度、当館では、昭和29年に吉田家から寄贈を受けた吉田松陰関係資料754点のうち、「吉田松陰自賛肖像」・「絶筆」・「松下村塾記」の修復を、（財）住友財団の助成を受けて実施しました。

第3回目となる今回のウィークでは、この修復を記念して、修復後、初公開することにしたしました。

この機会に、幕末維新史を語る上で欠くことのできない吉田松陰の直筆に親しんでいただき、アーカイブズ保存の重要性について理解を深めていただければ幸甚です。

平成20年6月1日

山 口 県 文 書 館

吉田松陰じ さん自賛肖像について

安政6年（1859）5月、萩野山入獄中の松陰に幕府から江戸送りの命が下された。同年10月に江戸伝馬町で処刑され、この後松陰が生きて萩の地を踏むことはなかった。吉田松陰自賛肖像は、最期の旅立ちを前に、松陰門下の松浦松洞まつ うら しょう どうが描いた師の肖像に、松陰が自賛したものである。

本像作成の経緯は、松陰自身が次のように書き残している。「十六日、朝、肖像の自賛を作る。像は松洞の写す所、之に賛するは士毅し きの言に従ふなり」（「東行前日記」、大衆版『吉田松陰全集』第9巻）。つまり、賛文を作ったのは、安政6年5月16日の朝、肖像を描いたのは松浦松洞で、賛を入れたのは小田村伊之助（士毅、楫取素彦か とり もと ひこ、松陰妹婿）の勧めであったことがわかる。また、跋文（あとがき）は、翌17日に作っている（前掲「日記」）。

松陰が自賛したものは、門下生の求めもあって複数作られた。賛文はほぼ同文であるが、跋文は書き与えた相手によって異なっている。

「自賛肖像」は、①吉田家本（山口県文書館蔵）②萩松陰神社本（萩市・松陰神社蔵）③品川本（京都大学附属図書館蔵）④久坂本（世田谷区・松陰神社蔵）⑤岡部本（周南市美術博物館蔵）⑥中谷本なか たに（個人蔵）の計6幅。作成時期が明らかかなものでいえば、萩松陰神社本が最も早く（安政6年5月17日）、中谷本（同年5月24日）が最後となる。また、別に「自賛のみ」で肖像を伴わないものが、①松浦本②福川本の計2幅ある（松浦本は後に人をして肖像を描かせたというが、所在不明）。都合、松陰が自賛したものは8幅である。

肖像の筆者松浦松洞（1837～62）は、萩松本の商人の家に生まれた。通称亀太郎、名は知新、字は無窮む きゆう・温古。松洞と号した。幼時から絵を好み、羽様西涯は ざま せい がいに四条派を学び、のち小田海僊お だ かい せんに師事した。松陰の教えを受け、尊王愛国の人となり、忠孝節義の人物を精力的に描いた。文久2年（1862）、京都で長井雅楽なが い う たを誅殺しようとしたが諫止され、同年4月京都粟田山で自刃。享年26。なお、松洞の伝記に、福本義亮著『勤王画士松浦松洞』（同著『吉田松陰の殉国教育』所収、昭和8年）がある。

松陰の容姿として、「松陰筋骨逞しからざれども、修幹瘦軀、亭然（そびえ立つ）として長し。少時騎を習ひ、また剣を学びしが、共にその妙に至らず。これ文中々割鶏の力なしと称する所以か、顔やや長く、隆準（高い鼻柱）にして、白面に痘痕（あばた）を帯ぶ。一見威風の人を襲ふものなし。ただ眼光の爛々として他を射るのみ」との評がある（広瀬豊著『吉田松陰の研究』）。本像は、そういった松陰の容姿をよく表している。

ところで、肖像自体はいつ描かれたのであろうか。それに関しては、次のような記録がある。

「松浦松洞が先生の肖像をかきし時は、其顔を似せるに苦心し、幾度もかきて先生に見せたり、先生は鏡を以て之れに照らして批評せられ、像遂に成る、元来松洞が先生の像をかき始めたは、先生東行の頃より二三年前にて、村塾にてかきたるなり。かねてより、身の行く末を慮られたるなり。松洞のかきしは、余その現場を見たるなり」（門人平野清実の談話、「関係雑纂」、定本『全集』第10巻）

「吾が友無窮（松浦松洞）は画家にして、（中略）、今吾れ將に往かんとするや、復た獄に來りて吾を貌す。吾れ果して終りを善くすれば、此の像當に清狂と并せ伝ふべし。此の像連作数本あり、此れ其の家藏に係る（後略）」（「東行前日記」安政6年5月21日条）。

以上から、肖像は、安政3、4年頃から松浦松洞が描いており、江戸送り直前にも野山獄中の松陰を訪ねて描いたことがわかる。

ただし、その頃の松陰は、陰しく刺々しく、髪が乱れて顔を覆うという姿であったらしく（「久坂玄瑞書状案」高杉晋作宛、安政6年5月24日、吉田松陰関係資料201、妻木忠太著『久坂玄瑞遺文集』上）、その姿を描いたものではない。

では、肖像の出来映えについて、松陰はどう思ったのか。安政5年暮に入獄する際に、入江杉蔵から「子の面目復た見るべきこと難し。子の面目を見るべきものは、其れ唯だ文辞か。願わくは為に一言を留められんことを」と願われ、「予戯れに之を拒みて云わく、吾れ画を善くせず、画を善くする者は松洞生なり。向に余の面目を写せり。面目みるべし、何ぞ文辞を必とせん」（「松陰詩稿」、大衆版『全集』第6巻）と答えており、出来映えは、松陰自身が認めるものであったことがわかる。

しかし、何よりも、吉田家本の跋文に、「顧ふに無窮（松浦松洞）は吾れを知る者、豈に特だ吾が貌を写すのみならんや、況や吾れの自ら賛するをや。諸友其れ深くこれを蔵せよ。吾れ即し市に磔せられるとも、此の幅乃ち生色あらん」と記している。自賛肖像は、最期を迎えようとする松陰の、気魄を込めた作品といえよう。

けん ぼん ちやく しょく

絹本着色吉田松陰像（自賛）

〔吉田家本〕

安政6年(1859)5月21日

松浦松洞筆

絹本着色 掛幅装 箱入 縦99.1cm・横35.8cm

〔賛・跋〕関防印「日夕佳」（朱文方印）／落款・二十一回猛士藤寅撰并書、「吉田矩方」（白文方印）、「子義氏」（朱文方印）

吉田松陰関係資料164／山口県文書館蔵

諸本の中では唯一の胡座像であり、羽織を纏わず、脇差を左脇に置き、右手で書物の頁をめくる。紺色の着物が画面に締まりを与え、賛文の整然さと相俟ってバランスの良い自賛肖像となっている。「顔やや長く、隆準（高い鼻柱）にして、白面に痘痕（あばた）を帯ぶ。一見威風の人を襲ふものなし。ただ眼光の爛々として他を射るのみ」（広瀬豊著『吉田松陰の研究』）と評される松陰の容姿をよく表している。賛・跋は別掲のとおりである。

賛文の末尾が「人宜立志兮聖賢敢追陪」とあるのは本図のみで、他本はすべて「古人難及兮聖賢敢追陪」となっている。本図と萩松陰神社本の跋文は、特定の人物を対象とせず、「諸友」に宛てた内容となっている。本図と萩松陰神社本の2幅のみが絹本であり、他はすべて紙本である。

なお、本図の完成日を記した資料は確認できないが、内容からみて萩松陰神社本とほぼ同時と考えられる。賛跋の筆致、肖像の配置など作品全体のバランスも良く、萩松陰神社本と並ぶ吉田松陰自賛肖像の秀作である。

ちなみに、松陰が使用した印は4顆6種である。このうち、小さめの「日夕佳」・「矩方」、「吉田矩方」・「子義氏」の4種（両面篆刻のため2顆）は、山鹿流兵学を松陰に伝授した林百非が刻して与えたものである。自賛・跋に捺した印の組み合わせは2通りある。関防印に大き目の「日夕佳」、落款に「吉田矩方」「子義氏」を用いた場合と、関防印に小さめの「日夕佳」と落款に「矩方」の場合で、本図と萩松陰神社本は、前者である。

松下村塾記

土屋蕭海批評

安政3年(1856)9月5日

紙本墨書 掛幅装 箱入

吉田松陰関係資料94／山口県文書館蔵



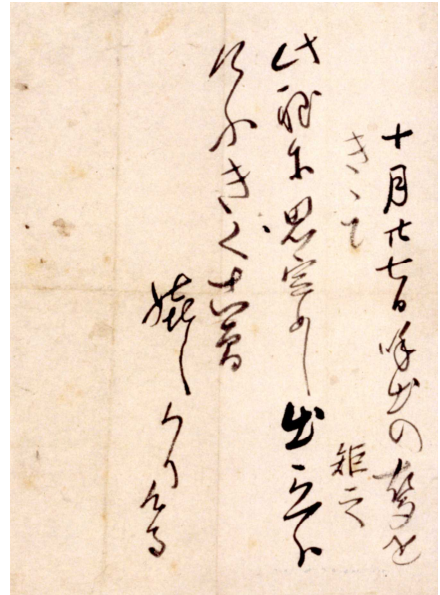
松下村塾は、叔父の玉木文之進が創設し、親族の久保五郎左衛門、そして松陰へと引き継がれる。本書は、その久保の命によって記したもので、松陰の教育に対する高い理念と抱負が雄渾な文章でつづられている。友人土屋蕭海による朱筆の批評しようかいが加えられている。

絶 筆

安政6年(1859)10月27日

紙本墨書 掛幅装 箱入

吉田松陰関係資料171／山口県文書館蔵



安政6年10月27日、松陰は江戸伝馬町^{てん ま ちよう}の刑場で処刑された。呼び出しの声を聞いて、懐紙に最期の一首を書いたもの。

「此程に 思定めし 出立ハ けふきくこそ 嬉しかりける」

第4句の字数が足りないことに気づいたが、推敲する間がなく、「く」の側に「、」をうったまま筆を置かざるを得なかった。

紙本墨画山水図

文久元年（1861）12月21日

松浦松洞筆

松元淳収集史料69／山口県文書館蔵

松陰肖像画の絵師・松浦松洞の作品。

賛文は、徳山藩士池田梁蔵（号・青波）が、
唐宋八家の一人王安石（王荊公）の「桃源行」を
下敷きにして作った詩を、松洞が書き記したもの。

望夷宮中荒為馬秦人半死長城下避時不獨商山翁
亦有桃源種桃者一來種桃不記看采花食實枝為薪
兒孫長生與世隔知足父子無君直漁郎放舟迷遠近
花間忽見驚相問世上空知古有秦山中豈料今為晋
聞道長安吹戰塵東風回是亦沾巾重華其寧復天
下紛々經幾秦

辛酉臘月念一日畫并録王荊公詩似
青波池田老兄清玩（カ） 洞知新

（印）（印）

